異国の風聞に関する文書を読む

１　林家文書について

（１）林家

・林家は、比企郡赤尾村（現坂戸市赤尾）の名主を勤めた。名主としての働きが賞され、歴代には苗字を名乗ることが許されているものが多い。

・林家は３代信正（図書）以後、代々赤尾村下分の名主を勤め、１１代目の幸蔵（佐伝治）は文化元年（1804）に名主としての功を賞され、苗字を差し免され、また隠居時には酒代二百疋も差し遣わされている。また、１２代信豊（半三郎）も「度々出水之所、村方極難之者共へ食物差遣、加之水難ニ付其身江被下候御手当金橋入用除遣候旨、奇特之事」として苗字御免を受けている。赤尾村は、越辺川通りに位置することから、度々洪水に見舞われ、名主として代々治水に腐心していたことがうかがえる。１３代信海（半三郎　1804～1862）は弘化元年（1844）から文久２年（1862）に渡って名主を勤め、治水等にその業績をあげ、安政元年（1854）に名主の頭取格を仰付けられている。

・信海は、特に文人としても知られ、和歌に堪能であった母″志げ″の影響を受けてか文雅の世界に強く関心を寄せ、近隣の石井村の名主であった井上淑蔭（1804～1886）とともに国学者清水浜臣（1776～1824）の門弟となって和歌を詠じたほか、公私を含め多くの日記を残している。

（２）赤尾村

・赤尾村域は中世から児玉党小代氏のもとで開発がなされており、近世では慶長２年（1597）の検地帳が部分的に現存する。当村は、もと幕府直轄領で代官支配下であったが、のちに旗本大久保氏が一部知行を受け、また松平信綱の川越入城にともなって大久保氏と川越藩との相給となった。後に全村川越藩領へと推移した。その中で、林家は代々赤尾村下分の名主を勤めていた。

２　［歌日記］について

１帖。残念ながら、表紙を欠くため当初の名称は不明で［歌日記］は便宜上付した名称である。本文中に嘉永３年（1850）の年記があるため、その頃に執筆されたものと思われる。

日記は林信海が名主を勤めていた時期の執筆となるが、その内容は名主の公務の書き留めとしての側面は薄く、見聞した事柄に対する所感について自身が詠じた「和歌」が主役となっている。記された和歌からは、歌人であり国学者であった信海の教養を垣間見ることができ、貴重な資料といえる。また、今回テキストに選んだ箇所では、信海が海外事情に深く関心を寄せていたことが伺え、外国勢力が跋扈する日本周辺の現状についての信海の心境をも伺い知ることができる。

３　日本を巡る諸外国の往来と異国への関心

江戸時代を通じて、日本はいわゆる「鎖国」政策のもと、国外勢力との交渉は、朝鮮（李氏朝鮮）、琉球王国との通信（外交）のほか、長崎の出島を介して中国（明・清）、オランダとの間に制限付きの通商が行われるのみであった。

しかし、江戸時代も後期になると、ヨーロッパ列強のアジア・太平洋進出に伴って否応なしに外交交渉に応ぜざるを得なくなった。

名主ら村役人たちは、幕藩体制を支える末端に位置していたとともに、自らの村を守るリーダ

ーでもあった。そのため、政治の動向や社会情勢の変化に対応するためにも、敏に情報収集に努める必要があった。特に江戸時代後期になると、浅間山の噴火をはじめとする災害のほか、打ち壊しなどが頻発するなど社会不安も増大した。そうしたなか、日本に来航する国外勢力の台頭は村々のリーダーたちにとって新たな脅威として、様々なルートを通じて情報収集をする必要に迫られた。

４　語句解説

・**去ル卯年**…直近の卯年は天保 14 年（癸卯　1843)。ただし、長崎に来航したフランスから日本に交易要求が出されたのは 1846 年（弘化 3）となる。

・**紅毛国**…白人のこと。ここではオランダか。

・**ようらハ州**…ヨーロッパ。

・**まをす**…申す。

・**天竺**…インド。

・所々ニ御造立…弘化年間に頻繁に来航した異国船（米国）に対し、三浦半島に台場が相次いで設置される（猿島台場、千駄崎台場、箒山台場、亀甲岸台場)。

・**七数**…英国の兵制度を指していると思われる。後掲の『海外新話』では英国の軍備について、「民兵を選ぶには七十にして一を取り、十八よりして四十五歳に至る者を限る」とある。

・**わなミ**…我儕、吾儕。わたしの意。

・**みいつ**…御厳、御稜威。天皇や神の威光。

・**入間郡谷中村**…入間郡川越領にあった村。のち芳野村の大字、川越市の大字として名が残る。

・**比企郡鎌形村**…もと幕府領で天保１３年から川越領となる。のち菅谷村の大字となり、現在も嵐山町の大字として名が残る。

・**鏡葉**…カシワ、ツバキの葉を指す。

・**海外新話**…1840 年に起こったアヘン戦争での清国敗北を受け、嘉永２年（1849）に刊行された。著者は丹後田辺藩士嶺田楓江。外国事情を記した書物の開板は好ましくないとして、翌３年に版行禁止とされ楓江も押込となった。しかし、陰では重版がなされており、当時の人々の興味関心を満たす書物として人気があったことが窺える。

・**林則徐**…当時清国で問題となっていた阿片（鴉片）禍を解決するため、道光帝の命によって貿易の窓口であった広東に派遣されて取締りにあたった。厳しい取締りが英国との軋轢を生み、アヘン戦争（1840-1842）を招いたとして罷免された。大国清が英国に敗れて南京条約を結ばされたことは、江戸幕府に大きな衝撃を与えた。

定海城は現在の浙江省に属する島。アヘン戦争時英国に占領された。

伊里府（伊里布）・**琦善**は、林則徐の跡を受けて英国との交渉にあたった清国の大臣。

・**英夷国女主名城唎**…アヘン戦争当時の英国はアレクサンドリナ・ビクトリア女王の治世下。

・**おほたから**…人民、民草。

・**えたち**…役。人民に課せられた労役のこと。

・**ちふ**…と云ふ、の意。

・**くなたふれ**…頑迷で愚かなこと。